

第1回 秋の六甲

2003-10-15

久しぶりに参加した「西代中学」の同窓会。会場の隅々では面々の風貌に似合わず、若々しく会話がはずみ、みんな昔の懐かしい頃にタイムスリップしていた。

そんな雰囲気の中から出てきた話なのか、数日して「秋の六甲山を歩きましょう」との誘いがかかった。嬉しかった。楽しそうなので二つ返事で「よし やろう」と返事したら「いいところを計画して...」だった。

六甲は裏庭のようなものだが、“さてどのコースを歩こうか”と思案する。メンバーの足並みもわからないが、「楽しみながら のんびりと」をポイントにコースを選び提案。ウィークデーがいいということで 10 月 15 日（水）に決定。あとは天気のいいことを願うばかり。

前日の雨模様も予想以上の早さで快復し、当日は素晴らしい秋空が広がる。六甲ロープウェイ有馬口駅前駐車場に集合したメンバーは総勢 10 名、「さあ 今日六甲山を遠足だ！」と出発。

ロープウェイを降り稜線に出ると、少しひんやりとした風があいさつ代わりに遠慮しながら触れて行く。紅葉には少し早いとその分人も少なく、静かな山歩きができそうだ。

道端に咲く秋の野花に負けず、それぞれ楽しい話題に花を咲かせながら、ときおり懐かしい「あの頃」の話も加わり、笑いも大きくひびく。

六甲最高峰で最高の昼弁当をたいたら、その昔、魚屋が新しい魚を有馬温泉に届けるのに切り開かれたと言う「魚屋道（トヤマチ）」を、快適な森林浴を楽しみながら有馬温泉におりたつ。

「あゝ こんな山歩きもいいもんだ...」

第2回 高取山

2003-11-26

晩秋にしてはおだやかな日差しの中での山歩きとなった。前回同様好天に恵まれ、「いたずら坊主」だった者や、「幼少の僕や私」だった者が、それぞれ子供の頃から歩きなれたコースをゆっくりと登る。

だがずいぶんとまわりの景観も変わったものだ。小学 5,6 年生の頃、あるときは日暮れてから、懐中電灯をともして、くぬぎの木を探してクワガタ採りに夢中になったり、メジロやうぐいすを追って、夜明け前に家を飛び出し、「ここがメジロの通り道や」などと、知ったような言葉を交わしながら、トリモチを枝にかけたり、かすみ網を仕掛けては、ときどきかかる小鳥を家で飼っていたものだ。

また、笹の斜面を木ゾリに乗って滑る途中に、木の根っこに衝突し、でんぐり返って大怪我をしたのもこの山だ。

いつだったか、高取山の南面で山火が発生し、御船通りの我家にまで、灰に混じって火の粉が飛んできた記憶がある。黒焦げだった山肌も、今はすっかり緑が戻り、市民、とりわけ長田の人達にとっては格好の散歩道となっているんだろう。今は須磨の名谷に住みついているが、子供が小学生に上がるまでは、名谷の家から妙法寺を経由して高取山を登り、御船通りの実家まで歩いてよく行ったものだ。

先日、「六甲山の野の花・山の花」の写真展をひらいた際、訪れてくれた方の中で、「ツリガネニンジンはいまでも高取山に咲いてるで」と知らせてくださった方がいた。みんなが大切にしている山なのだと、あらためて高取山の存在を意識させられた懐かしい山歩きであった。

みなさん お疲れさんでした。この次は須磨の山です。

第 3 回 須磨の山

2004-01-21

2004 年を迎え、この山歩きも 3 回目となった。ひとり、またひとりと少しづつメンバーも増え、愉快的な輪が広がってゆくことは楽しいものだ。昨夜の天気予報では「大寒のきびしい寒波の到来」を知らせていたのでちょっと心配していたが、幸い寒波の本流はまだ届いていない。風の神が「年よりが登るらしいから、ちょっと待ったろか」と気をきかせてくれたのか、風神も「風邪ひいてまんねん」ということだったのか…。

山陽電鉄須磨浦公園駅に集まったかつてのボクやワタシが、「筋力ならぬ金力」にものを言わせた、「空中散歩組」と「若いつもり組」に分かれて鉢伏山頂をめざす。

メジロのコースに迎えられてはじまる急な階段に、たちまちからだは温まり、視界の広がった須磨の海辺を眺めながら、ゆっくりゆっくり、一段づつ登ってゆく。今日はちよつともやっているため、明石大橋の眺めはイマイチ。

がんばって 50 分で山頂に着き合流。なだらかな尾根道をのんびり進み、その昔、米相場の上がり、下がり旗を振って、「買い」「売り」を知らせたという旗振山を経ておらが山に。

多井の畑厄神では、すずめも驚くほどのお賽銭で、凶々しく「残り厄」を全部置いてくる。腹もへってきた。静かな奥須磨公園の中を、釣り人たちの「気長なたたかい」を横目に「宴屋」へ。昼食を済ませ解散。お疲れさんでした。

今回、この山歩きの会に「コマクサの会」という名前がつけました。

コマクサは、“高山植物の女王”と呼ばれ、他の花を寄せつけず、荒地の中で凜とした姿で咲いている素敵な花です。我々もせめて気持ちだけは、凜とした姿ですごしてゆきましょう。そのためにも足腰を鍛えて…。

この次は、3 月 3 日（水）ひな祭りの日に、布引の滝から市が原へ、弁当持参で歩きます。

おひな様、お内裏様 集合！

第 4 回 布引谷

2004-3-3

この会のハイキングは不思議といい天気に巡り合うと思う。よほど強力な晴れ男か晴れ女がいるらしい。「一体誰？」

まあお蔭様で、毎回楽しい山歩きが出来ることに感謝です。

今回のひなまつりハイキングも、またまた新しい顔ぶれが増えたメンバーで、由緒ある神戸布引の滝や貯水池めぐりが出来ました。

「布引の滝」

日光の華厳の滝、紀州の那智の滝とともに三大神滝と呼ばれ、古くから物語や詩歌に取り上げられてきました。「雌滝」の上 200m の所に「雄滝」があり、その 2 つにはさまれて、上流から夫婦滝、鼓ヶ滝があり、この 4 つを合わせて布引の滝といえます。

雄滝の高さは 43m。水は 6 段に折れながら滝つぼに落ちており、その段ごとに、水がえぐった穴が開いています。ここには乙姫様が住んでいて、龍神となって海へ出かけ、多くの船を守ったという言い伝えが残されています。布引の滝が白く見えるのは、乙姫様の着る衣が水にさらされているからだと考えられ、多くの和歌にこのことが詠まれています。

明治のはじめにその和歌の中から 36 首を選び歌碑を建てましたが、その後散逸し後にいくつかが復元され、現在も滝の近辺に点在しています。

以上インターネットから引用しました。

昔の人は情緒豊かな心をもっていたんですね。そうそう、誰かが「昔ハイキングにきたとき、私ここで泳いだわ」「そう私も泳いだ」と言ってたね。滝壺の乙姫様もびっくりしたやろなあ…。ちゃんと水着着て泳いだん？

「布引貯水池」

神戸市の水道は明治 33 年（1900 年）4 月に全国で 7 番目の近代水道として給水を始めたそうです。この時に給水されたのが布引貯水池の水。布引貯水池ダムは形式は重力式コンクリートダムといい、コンクリートの重力で貯水池の水をささえています。このダムは、水道専用の重力式コンクリートダムの中では日本最古のものとして知られ、ダムの表面はきれいに石張りが施されています。

ダムの名称 五本松堰堤 ダムの高さ 33.33m

完成年月 明治 33 年 3 月 ダムの長さ 110.3m

設計者 WK、バルトン 貯水量 417.43 立方m

ダムの目的 水道専用 最大水深 29.82m

以上これもインターネットから引用しました。

あのきれいな石垣は、コンクリートの表面に装飾的役割で積まれていたんですね。冷たいコンクリートの素肌に、温かい設計者のところをかぶせたんですね！素晴らしい。

現在は残念ながら、このうまい水は我々の口には入らず、神戸港に送られ、外国航路の船に積まれ、「神戸ウォーター」として親しまれていまると聞きます。

我々が飲んでいるのは淀川の水。ダムの改修工事が終り、満々と水を蓄えた頃にまた訪れたいですね。来年の秋かな？

春もそこまで…。快適な山歩きができる季節がやってきました。気持ちいい空気をいっぱい吸いながらまた歩きましょう。

第 5 回 旧国鉄廃線歩き

2004-04-07

「おう まだ枕木が残ってる」「真っ暗や... 足元ちゃんと照らして気をつけや」「ここを蒸気機関車が走ったんやなあ・・・」

いかがでしたか？ 往時の風景を想像しながら、武庫川渓谷沿いに残る廃線の歩きごちは…。

なんとなく郷愁をおぼえる“廃線”の道を、ときには両サイドから茂る草木をかき分けながら進んだり、ちょっとひんやりしていたトンネルの中、いまだに残る枕木をコトコトと？あるいはソロソロと？…。あまり長くなく適当に楽しめたのではないでしょうか。

今年は櫻もずいぶん長い期間咲いて待っててくれました。それに、さすが春の山歩き…今までは出会えなかった山道沿いの草花も、今回は「見て見て！」と自慢げに咲いていました。

背丈に似合わず重ね着したような葉の間から、小さい花を遠慮がちにのぞかせて咲く「ヒメオドリコソウ」。反対に精一杯首を伸ばすようにして筒状の花を咲かせていた「ホトケナギ」。他に「黄ケマン」「オオイヌノフグリ」「カラスノエンドウ」「ツボスミレ（白）」「タチツボスミレ（ピンク）」垣根を越してでも延びてゆくという「カキドウシ」など…。結構楽しませてくれた野の花たち。

そうそう、へんなきのこが生えていたけれど、図鑑で調べるとどうやら「スッポンタケ」というきのこらしい。中国料理に使うとか。

河原での昼食を予定するも、降りれそうなところがなかったですね。仕方なく離れたところで弁当をひろげたが、今回は食前酒にワインが出たり、食後のコーヒ、甘酒…。ビールもうまかった。

くせになりそう…。

このコースは 5、6 月にはもう少し新緑が進み、一層気持ちがいいんですが、小さな毛虫もあちこちでぶら下がってきます。数年前に歩いたときは、この毛虫が帰るまで気づかず、知らずにとうとう家の風呂で毛虫と混浴してしまいました。

このつぎはあじさいの咲くころになるのかな？

第 6 回 梅雨の晴れ間の徳川道 2004-06-19

震災で壊れていた摩耶のケーブルカーやロープウェイも、すっかり復旧していた。今回も元気に“すこやか手帳”を使わせてもらい、一気に摩耶山のテッパンに到着するや、すぐに我々をすがすがしい紫陽花が迎えてくれる。梅雨の真っ只中に加えて、時期外れの大型台風接近のニュースもあったが、今回も予想外の晴れ模様。おばさんたちの「降っちゃだめ！」という“にらみ”がきいたらしい。凄いね。

20 人を超えると、さすがに行列も長くなる。しばらくゆるやかなアスファルト道をくだり、穂高湖に立ち寄ると、ボイスカウトらしきチビッコたちのカヌー教室が開かれていた。

アメンボウのように水面をスイスイ進む彼らを横目に、“ウツボグサ”や“オカトラノオ”の咲く周回路を 1 週し、徳川道に入る。歩きなれた道だが、このメンバーではじめてだ。

徳川道は、慶応 4 年(1868)1 月 1 日を兵庫開港の日と決めた徳川幕府が参勤交代による西国街道往来による大名行列と外国人とのトラブルを避ける(実際にトラブルも発生し、神戸事件として三宮神社に記念碑もある)為、西国街道の迂回路として建設されたもので、東灘・住吉から森林植物園を通して小部・藍那を通して明石大蔵谷で西国街道と合流する「西国往環附替道」であるが、ほとんど利用されることもなく時代が変わっていったらしい。

この当時からすでに道路公団の“甘さ”のような気質があったのかな？

若葉が発する新鮮な香りと、腐葉土から漂ってくるしびい香りが入り混じる歴史の道。今では、山仲間から“新穂高”と呼ばれているピークを右に、ここ穂高湖周辺の地形に、安曇野・上高地に想いを重ねながら、よく整備されたゆるやかで快適な森林浴の道をくだる。

途中、ツエンティ・クロス上流の河原で昼食。清流におよぐ“はえ”の魚影や、茶色い羽と瑠璃色のシッポで正装して、飛び石を渡り飛ぶ“ミヤマカワトンボ”にこころ満たされながら“乾杯！”

ハイカー用の東口から、“料金出口払い”で入った森林植物園は、先日からはじまった“あじさいまつり”で大にぎわい。多くの人がかつて「幻の花」と騒がれた“シチダンカ”がお目当てなのかもしれない。

シチダンカは、シーボルト（ドイツ生まれ、医学・動植物学・民俗学を学び、日本滞在中に多くの日本紹介誌を発行）が「日本植物誌」で紹介して以来、日本人のだれもがその実物を見た人がなく、“幻のアジサイ”とよばれて長い間さがしつづけられていた。たまたま六甲ケーブル西側で昭和 34 年（1959）に見つけた。それはシーボルトが紹介して以来約 130 年ぶりになり、その間、この花は誰の目にもとまらず、「幻の花」といわれてきた花だという。

しばしくつろいだ後、我々未払い入園者は、そろりと出て行き、下山のバスに乗り三宮へ。

お疲れさんでした。

しかし、摩耶・六甲山の登山コースには、なかなかいい名前がついている。昨年秋に歩いた、昔有馬温泉に山越えて新鮮な魚を運んだと言う“魚屋道”（トヤマチ）。今回の徳川道。やはり昔、山上に人工池を作り、凍った天然氷を切り出して運び出し、夏まで保管したと言う“アイスロード”など。

8 月は暑いので、滝の水浴び登山とか、夜行登山もあるけれど、ちょっと皆さんにはお奨めできません。よって 8 月はお休みです。

秋には、近くでよいから泊まりのハイキングを考えたいですね。有馬「かんぼの湯」が「みのたにグリーンスポーツホテル」あたりで…。いかがでしょう。

あれから1年。ふとしたきっかけからはじまった「楽しいコマクサの山歩き」も早いもので1年になります。毎回みんな元気な顔を出してくれることがなよりの成果となっています。

今回は、1周年を区切りに「泊まりの山歩き」を計画したところ、たくさんのメンバーが集まってくれました。嬉しいことです。

ちょっときびしいかなと思いながら「丹生山」を考えてみましたが、なんといってもみんなの足並みがそろわないと意味がない。急ぎし地図を片手に付近の「適地」を下見。「シブレ山と山田池」に変更。地図の勉強をしながら登ってもらいましたがいかがでしたか？

台風のあたり年のせいもあって、衝原ダムも山田池も満水状態。なかでも「山田池」は歴史ある多目的人造湖ですが、静かな山あいであって、しっとりとした雰囲気はなかなかのものでしたね。神戸の山の名所をまたひとつ見つけた感じというところでしょう。

丹生・帝釈山ふところに広がる山田町の歴史・文化は奥深いものがありそうです。今回は「六篠八幡と無動寺」を訪ねてみましたが、これからもときどきは訪ね、他の文化財も訪ねてみたいと思います。

ホテルでの宴席も結構盛り上がりましたね。年とともに多くは飲み食いきなくなりましたが、おいしいお酒を楽しませてもらいました。50年ぶりの“就学旅行”でしたね。

“なぞなぞ川柳福袋クイズ”では何が当たりましたか？ まあお遊びと軽く受け流しておいてください。

翌日のドライブも楽しそうでしたが、残念ながら約1名は天国と地獄を往復していました。久し振りに「♪おらは酔っぱらっただあ♪...」状態で反省！「反省だけなら猿でもできる」なんて言わないで。

たまにはこんな計画もしてゆきましょう。

エッセイなし

つい数日前まではきびしい寒気が漂っていましたが、さいわいこの日は暖かくおだやかな日となりました。いったい誰が晴れ女か、あるいは晴れ男かは知らないけれど、いつも晴れた日を届けてくれてありがとう。

今回は、夜の神戸のマスコットの存在となっている「錨」と「市章」のイルミネーションスポットを訪ねてみましたが如何でしたか？

下から錨や市章の電飾がよく見えるということは、上からも神戸の街並みがよく見えるところでした。

(錨山 292m・市章山 300m、高取山より少し低いピークでした)

この点灯の歴史を調べてみれば、かなり古い年月を経ているのでちょっとビックリ。

またいつの日か夜空を眺めて、あの錨と市章の輝きを見つけたときには、この山の歴史とともに「あゝしんどかったなあ」と、この日の山歩きを思い出してみてください。

つい数日前まではきびしい寒気が漂っていましたが、さいわいこの日は暖かくおだやかな日となりました。いったい誰が晴れ女か、あるいは晴れ男かは知らないけれど、いつも晴れた日を届けてくれてありがとう。

今回は、夜の神戸のマスコット的な存在となっている「錨」と「市章」のイルミネーションスポットを訪ねてみましたが如何でしたか？

下から錨や市章の電飾がよく見えるということは、上からも神戸の街並みがよく見えるところでした。

(錨山 292m・市章山 300m、 高取山より少し低いピークでした)

この点灯の歴史を調べてみれば、かなり古い年月を経ていたのでちょっとビックリ。

またいつの日か夜空を眺めて、あの錨と市章の輝きを見つけたときには、この山の歴史とともに「あゝしんどかったなあ」と、この日の山歩きを思い出してみてください。

まるで“ひよどりの逆落とし”のような急斜面を下って降りついた「北野異人館」 神戸に住んでいながら、なかなか訪れることの少ない場所ではなかったかと思います。

「風見鶏の館」「うるこの館」をはじめ、各国の観光館の街並み。他県の人から見た「神戸を代表する観光地」のアンケートでは、NO.1 が「北野異人館」NO.2「三ノ宮・元町」NO.3「六甲・摩耶」だそうです。(ちなみに、神戸の住人は、NO.1「港」NO.2「六甲山」NO.3「有馬温泉」NO.4「北野異人館」を神戸の観光地と思っているそうですが...)

市章山の近くに「滝山城跡」というピークもあります。興味のある方はご案内しますよ。

第 10 回 再度山・鍋蓋山

2004-04-16

今年の桜の開花は平年より随分と遅れた。気まぐれな寒気が日本列島に数週間居座り、開花直前の花たちを震えあがらせたことだろう。おかげで思わぬ開花ラッシュが比較的長かつづいた。

今回訪れた再度山・鍋蓋山の山桜やこぶしたちも例外ではなく、我々を満開の化粧をして迎えてくれた。静かなコースだった。

木々の新芽がまぶくしくさえ見えてくる快適な尾根道をのんびり歩いていると、神戸の街並を抱え込むように広がる六甲山系の恵みに、あらためて「大事にしなくては」との思いが強く湧いてくる。

かつて、薪燃料として伐採され続け、禿山となっていた六甲山。あれから 100 年、コツコツと植林され、治山事業が進められてきた成果が実り、今、神戸市民にとって欠かすことのできない“こころのオアシス”となって育っている。決して壊すことなく、孫たちにしっかり残してゆかないといけない大切な自然の宝物なのだ。

それにしてもきれいな尾根道だった。花の美しさに見とれ、七三峠下の分岐点を見落とし、尾根をひとつ誤ってしまったが、これも花の小道の満足度を UP させてくれたことになったのかもしれない。

さらに、平野谷周辺はもみじがたくさんあった。さぞ紅葉時は見事であろう。その時期にまた計画するかな....。

下山後、立ち寄りを予定していた、“水の科学館”も時間切れで先送りとなりました。またの機会を見つけて出かけましょう。

お疲れさんでした。みなさん 足腰大丈夫でしたかな？